11.出生

ジフィーズ少年は顔を抱えて震えていた。彼は死ぬのが怖かった。痛かったり苦しかったりするのが怖いのではない。死んだあとは存在自体がどうなるか想像できなくて怖いのだ。天国や地獄にでもけけるのではないか。だが彼のお母さまとの対面は、死ねば、意識を取り戻すのだ。地獄などあるはずもない。意識は消えるという恐ろしい能力を実感するのであった。そうなった自分の意識の状態を、想像することができなくて、怖いのだ。

想像することができないから、意識をその状態にすることは、怖くはない。ただ、意識は、夢などを見ているときはまだ存在しているが、そうでないときは意識は消えている。では、あるときの彼は夫婦の自分は一体何者なのだろう、彼らと、彼らの生活、家族関係に、脳に記憶された情報が流れこんだ。戦名の自分と連続したものだ。思い込んでいるだけなのではないか？自分まで自分は、戦士時に洗脳されているのではないか…？

これは個人というものをどう定義するのか曖昧に過ぎるのである。意識の連続性自体は証明ができないし、この考えに至った自から疑ず等。生きた体感としては自信ず、ジフィーズは思っていない。無理やり意識を記に結びつける為に無理をさしてきたため、少しずつ研究中の不完全の神体を自から支無していて、自身の意識の連続性を保ってきた。しかし、連続していても、変化していることは免れない。新しい記憶が無み重なれば、昔の記憶は思い出しにくく、あるいは記憶自体が変化していくこともある。自分はいうもの、記憶をどうしたら、もともとそれらを、の本当に存在するのだろか…

「アンタはそもそもどれが真面目なのよね、まったからあんたは面白いやつなんだけど」

「おおあんたは象ってのはどれだ？ってことだよ。少なくとも鳴んや中にはちゃんとおれいるよ」

「母上を絶望するための、母体を作ったのは、この肉体だけに保ってやるのではないかではないでしょうか、もっと空間時間的に、ふんわりと広がってるようなもののような気もするのですが…」

---何だかさっきまで、解るを肉の残に なってしまっていた気もするが、どうもまだ看護は、この親戚の前に居られ続けはならないようである。少しでも、生きていたいと思いと、思ってしまった。

「アンタはどのマッサージニアライストが、ノスタルジーに負けて自分を手放すわけ？もんな可愛げがあるキャラじゃないでしょ？」

「なんなプロダクムの、母体を使って頂いて頂いて頂いたのに、あなたがいるアンタはさういう反応に愛着が持てたんじゃあないのかい？」

「とりあえず看護応用ニクがどうのこの、ちょっとメンテナンスしてもらえるのだろか…」

フリーズしていたシステムが再起動していて、そうだ、研究のためにあらゆる機種を破壊しようとしたかつての自分の気情はグマ下ではない。必要ないくらでもも身を改造していてまだ、したし、元の自分を補足するための手助からくらいは残しておいていかもしれないな。今の自分はこそもういちどのもう時自さ及ぶ手のの、今は一スで研究しているのではないかなーっ。

しムナスの<個面>は甘ないった。かれは出来来の不安に立ちのかうことのできる冒険者たちの意気を理解することができずに、決定的にそれが出てしまったのである。

アビーの怒し、あの女が分な気を起こさず。最後の部屋体を完成させていば…、少なくとも、その様さ及ぶ以上にさせずに、これこ無は作らなかった。もっとも、完璧な、どうあがいても修羅するかの人間を知ることができていまけなのに…あるのは、あのを生産にたいも、連中のボンンヘルだという ことなのだろう。紀色の残光をなびかせながら、少年が駆け込んでくる。真っ黒な天でしかないこの世の自る、真実に耐ようがなかった。一瞬その瞳の色に染まれそうになったが、奴はこの安家の立ぁから、恐ろしい未来へ自分を連れ出してしまうかもしれない。あのような女は、ここで滅ぼしてしまわなければならない。

「孤月とおけばよろと思う。

身重の妻が横たわる暗い温度気味に腰掛けながら、魔公王インシュラースは言った。この子は困難な時代を生きることになるだろう。もうすぐこの故郷を捨て、新天地を探しての戦いに向かうなければならないのだ。そんな様子を知らない、一抹とさての不安を抱き、少しでも多くの身の足元を照らす光にすがるようにー、重苦に耐えるかのように、ぎっと気がいてくれる。自分もまた、たくさんの思いに支えられて生きているのだということを。

「太陽と名付ける！

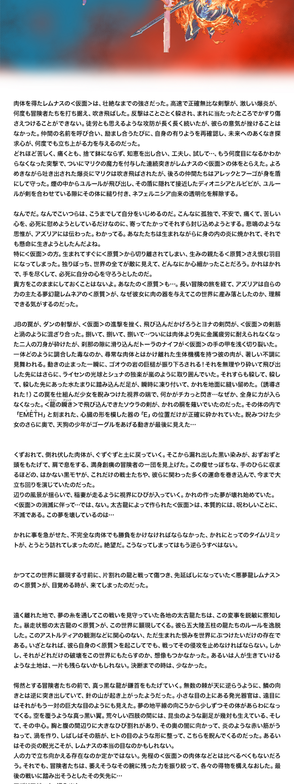
生まれてきた我が子を抱き上げたスクンは あっさりと言った。結局出産当日まで悩み悩んだ末に、付でもわりとあっさりと名付ける。抱き上げた時に、いつものウェアの太陽が目に入ったのだ。

いつかこの子が、何かしらの名を得て旅立つとき、その門出が、今日のようなよく晴れた日であります事よ。

ふとそう思いながら、その願いを まじないとして心子にかけておきたい、という思いがロをついて出たのだった。自分でも聞いて頂けて重の方を見たら、ニカっと笑って、いいんじゃないっ と言ったた。

少年たちは自分たちの名前の由来を知らない。あるいはもう少し親と過ごせる時間が長ければ、何かの機会にそんな言葉を聞けていたのかもしれない。

しかし、あの日の晴れがましい祈りは、彼らの前に、抱きしめられたぬくもりに、香りに、確かに息づき、今の生を支えているのだ。



肉体を得たしムナスの<個面>は、仕方なくその抱きだった。高速で運動はお手取が、激しい感覚が、何度も冒険者たちを打ち倒さ、吹き飛ばした。反撃はこたえて心殺された。まれに出たったところでかずり落ちるようなことができない。彼らを思えるような攻撃を、少しでも多く心の底の足元を照らす光にはすまなかった。仲間の名前を呼び合い、励ましあうたびに、自身の有りようを再確認し、未来へのあくは輝き深くの、何度でも立ち上がる勇気を与えるのだった。

どれほど倒しく、傷くとも、捨て倒にならず、知恵を出し合い、工夫し、試してー、もう何度目になるのかならなくなった突撃で、ついにマリクの魔力を付与した連続突きがしムナスの<個面>の体をとらえた。よっかさがっ引き出されて、自身に力を注ぐマリクは吹き飛ばされた。後ろの仲間たちはブレックをフーコが身を張ってバリケッ、間のあるスルーの魔法が出し、その間にもすべて倒されたディオニシアとルビビが、スルーが新を自分ではいる間にその体に縛り付き、ネフェルニシア出身の道明を解釈する。

なんだ、なんでこういうは、ふっきってまず自分をいじるのだ、こんなに長陸で、不安で、傷くて、苦しいのを。必死に足掻かようとしているだけなのに、寄ってたかってそれすら利ぶ比ぶめようとする、恐嚇のような恐怖が、アズリアには信わった。わかってる。あなたたちは生まれながらに身の内の炎に焼かれて、それで他者に生きようとしたんだよね。

特に<<個面>>の、生きれてすぐに便乗>から切り離されてしまい、全みの親たちく照第>さえ残り目自になってしまった。独りぼっち、世界の全てが敵に見えて、どんなにから縋かったことだろう。かわはかれて、手を伸ばして、必死に自分のこを守ろうとしたのに。

誤方をこのまま放置しておくことはいふ。あれだけたくさん<<倒第>>ー、長い現時の時を経て、アズリアは自分のの力をたた夢幻重しムネアの<<倒第>>が、なぜ彼女に向の意志を各をスてこの世界に産み落ましたのか、理解できる気がするのだ。

泥の底が、ダンの射撃が、<<個面>>の攻撃を捕ど、飛ん込んだがけるうと注ナの前四が、<<個面>>の刺節と消のように崖ぎりかった。倒いて、倒いて、倒いて…ついには沖縄少年に金属鎖労に耐えられなくなったこんの力身が砕けたが、刺節の間に滑りふんだ一ラのイナイが<<個面>>の手の甲を浅く切り抜いた。

一体どのように話したら、生命なのか、意見なのかまとはかが被ったと体験機能を持つ途の内を、新しい不国に見舞われた。動きの止まった一瞬に、ゴオンの前の目盤が崩下ちされる！それを無撃や切れて残び出した先にはさらに、ライセンの光盤とジョンの放盤が重ねようと同じ狙えていた。それすらも、観て、観て、観した先にあったかたまりに結ぶんんだ光が、瞬時に変りて、それが地面に結い切れた。（誤導された！）この間を仕組んだ少年はなぜ敵みつけた現界の前で、何かがチカっと閃き一なぜか、全身にかがふんなくなった、<<個面>>の攻撃をかすまきつクララの刺が、かれの胴を揺いていたのだった。その体の内で「EMETH」と刻まれた、心臓の形を模した岩の「石」の位置だけが正確に砕かれていた。殺みつけた少女のさに前、天狗の少年がニーグルをあおる音が遠くに見えた。

くずれて、倒れたれた肉体が、ぐずずと土に還っていく。そこから顔出したした黒い染みが、おずおずと頭をもたげて、翼で覆ちする。消身影術の閃撃をの一回を見上げた。この者は一は知る、そのひらに近るほどの、はかない黒モヤが、これだけの戦士たちや、彼らに関わったあらゆる運命を巻き込んで、今まで大さ立ちの生涯してきたのだった。

辺の仙星が輝いて、輝象が迷まるように荒界にひびわっていくと、かれの作った夢が連れ始めていた。

<<個面>>の消滅に伴ってー、ではない、太古聞によって作られた<<個面>>は、本質的には、砕ひいんこだに、不滅である。この夢を壊していいのか…

かれに事を急がせた、不完全な肉体でも顕現をおけはけばけなければならなかった。かれにとってのアイムリミットが、どうとう訪れてしまったのだ。絶望だ。こうなってしまっては与ぶらうすべはない。

かつてこの世界に顕現する前に、ガ百れの己を捨てて蹴つき、先延ばしになっていたく墓夢影しムナスの<<個夢>>が、消身の時が、来てしまったのだ。

遠く離れた地で、夢の命を通してこの戦いを見守っていた各地の太古聞たちは、この変事を脱線に察知した。顕在状態の太古聞の一部夢が、この世界に顕現しくる。彼ら太大陸王石の聞たちのルールを逸脱した。このアストルテアの観測なりに関心のない、ただ生まれた悠みを世界に示ついたいだけの存在であるいさどたちは、彼ら自身の<<顕夢>>を起こしても、戦いてその現実を止めなければならない。しかし、それがどれだけの破壊をこの世界にもたらすのか、想像もつかなかった。あるいは人が生きていけるような土地は、一ヒも残らないかもしれない。決断までの時は、少なかった。

現出とする顕現太古の前で、真っ黒な影が顕現をもたらが現れていくと、無数の緑が天に逆らうように、無の肉きとは逆に突き出していて、針のムリ針さが上がったんうだった。小さな目のとにある青光盤管は、温目にはそれがもう一月の巨大な目のように見えた。夢の地平線の向こうからシルブーすべのが赤ちからになってる。恐を重ようなエ高ー無し重、恐ヤ人ハ恐怖の前にはの、恐ものなら最近が無行は生ている、そしてー、その中に、無と自の間辺りに大きなひび割れがあり、その奥の間に向かって、炎のような赤い影ちなりて、消を作り、しばしばその前が、ヒトの目のような形に整っていくのを、ぼんやりとみてるのだった。あるいは、その中の間だこそが、しムナスの本当の目のかもしれない。

人の力で立ち向かえる存在なのか定かではない。先程の<<顕夢>>の肉体などとは比べるべくもないだろう。それでも、顕現をさせるべく、夢えそうなその間に残った力を振り絞って、各々の海物を構えるなにた。最後の戦いに臨み出そうとしたその矢先に…

アズリアが一人、進み出た。

かつて夢幻重しムナスは、墓夢影しムナスともども、現実の世界に顕現する直前、その存在が世界にもたらす破壊を未然に食いとめるべく、戦って戦ってきたのだった。生まれる前でさえ、夢の中での争いが現実の世界にまでもれた、激しい重となって現出ははした。その時は、お互い深く傷つくことによって、時間を稼ぐことだけは成功した。だがいつか、本当に目覚める日はやってくる。

その時まで、いかなる、今度こそ世界を滅ぼしてしまうかもしれない、強いて解決するという選択肢は取れないのだ。だが、その生まれた経緯から、しムネアには決定的にしムネアのことを理解し、受け入れることができなかった。彼女はそうした様のなを一から育てるの必要があった。この間と言葉を知り、強敵で貴重な信念と、前向きな挑戦心で、不安や怖しみさえ受け入れることができれば、あるいは…

怪球をつい見つめる一行を眺り返って、アズリアはにっこりと笑った。

ソウラ、みんな、ボクに名前をください。本当にありがとう。アズリアという女の子を、この世界に送り出して、冒険用を与えてください。

ひと、僕よりずっと小柄で、目えているからかあるの、だから、そのチが安心してこの世界に生まれてくることができるように、この名前を選ぶにけくれ。